

## 『国語教師の知っておきたい日本語音声・音声言語 改訂版』

## 修正箇所一覧

## ○第1刷→第2刷の修正箇所

	第1刷	第2刷
p. 3 傍注4つ目	●上図では、話し手の声が発話手自身の耳に気導音（  ）と骨導音（  ）で伝わることを示しています。	●上図では、話し手の声が発話手自身の耳に気導音（  ）と骨導音（  ）で伝わることを示しています。
p. 16 9行目	(club [klʌb] を「クラブ [ku.ɾa.bu] など)	(club [klʌb] を「クラブ [ku.ɾa.bu]」など)
p. 34 4行目	区別を明瞭にするために、sheの子音 [ʃ] は後ろの方に舌を盛り上げて発音します。一方、日本語で「シ」は基本的に1つの音。[si] と [ʃi] の中間の音 [ɕi] として発音します。	sheの子音 [ʃ] は、歯茎後部と舌で摩擦を作り発音する他、後舌面が上がります。一方、日本語で「シ」は、[ʃ] よりも後ろの硬口蓋摩擦音 [ɕ] で、後舌面は上がりません。
p. 62 18行目	「メール」や「ボウリング」は、mailやbowlingの発音からすれば正しいですが、現在、主流となっている表記法ではありません。その理由は、日本語の「エイ」や「オウ」が表記通りではなく、長音化して [e:] や [o:] と読まれるからです。実際に、「メール」や「ボウリング」と書いている人でも発音は「メール」「ボーリング」となっている人が大半のようです。	「メール」や「ボウリング」は、英語の発音に近い表記で、正式な表記として使われることもあります。一般には、やはり「メール」「ボーリング」と書くことが多いようです。日本語では、「エイ」や「オウ」と書いても、[e:] や [o:] と読むのが自然で、特にカタカナ表記では長音符「ー」を用いるのが一般的だからです。
p. 76 7行目	楽器でも、ピッコロやバイオリンのように高い音を出す楽器は小さく、オーボエやコントラバスのように低い音を出す楽器は大きく作られています。人間の声も同じで、声帯を高い位置に上げ口腔までの距離を短くすれば高い音が出ますし、逆に声帯を下げ距離を広げれば低い音が出ます。このようにして人間の音は高さを変えています。	この位置の変化は、実際には、声帯を引っ張ったり緩めたりする筋肉が付いた軟骨の動きを捉えたものです。この声帯の張りによって、さまざまな振動数、つまり周波数の声の原音が作られます。また、声帯の長さや厚みによっても、声の高さは変わってきます。バイオリンやギターも、細かったり短かったりすれば高い音が出て、さらに張りを強くすれば高くなるのと同じです。このようにして人間の音は高さを変えています。
p. 186 19行目	口腔 3, 26, 29, 40, 76	口腔 3, 26, 29, 40

## ○第2刷→第3刷の修正箇所

	第2刷	第3刷
p. 15 10行目	私たちは、有限の音の組み合わせから、ほぼ無限の音の組み合わせを作り出し、	私たちは、有限の音から、ほぼ無限の音の組み合わせを作り出し、

○第3刷→第4刷の修正箇所

	第3刷	第4刷
p. 19 4行目	<p>ドイツ語やフランス語を勉強すると、「ウの口でイの発音をする」などの表現が出てきます。つまり、「イ」と「ウ」の中間の音であるということです。このような前舌母音と後舌母音の中間の音を<b>中舌母音</b>といいます。</p> <p>日本語でも、東北地方などのいわゆるズー弁や伝統的な名古屋方言などで中舌母音が見られるほか、共通語でも「ツ」や「ス」の母音は、前寄りの子音の影響で「ク」や「ヌ」などよりも前寄りの母音 [ɯ] で発音されます。</p>	<p>日本語では、東北地方などのいわゆるズー弁などで、「イ」と「ウ」の中間的な音が聞かれます。このような前舌母音「イ」と後舌母音「ウ」の中間の位置で発音される音を<b>中舌母音</b>といいます。</p> <p>このほか、共通語でも「ツ」や「ス」の母音は、前寄りの子音の影響で、(中舌母音ほど前ではありませんが)「ク」や「ヌ」などの母音 [ɯ] よりも、やや前寄りの母音 [ü] として発音されます。</p>
p. 19 傍注1つ目	<p>●ドイツ語のウムラウトは、後舌母音が前舌母音の影響で前寄りに発音されることを表しています。</p>	削除
p. 53 7行目	「概ね」「おおよそ」の20語ほどが「お」を添えます。	「概ね」「おおよそ」など20語ほどが「お」を添えます。
p. 157 11行目	しかし同時に、日本も批准しているユネスコの「子どもの権利条約」第28条にはこう書いてあります。	しかし同時に、日本も批准している国連の「子どもの権利条約」第28条にはこう書いてあります。

以上